

CAROWAA

CAROWAA — ちゃろわ

アチョリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィス
の現地スタッフが名づけてくれました。ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。

第1号深井戸引き渡し

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画」(Acholi Water)



井戸所有認定書を掲げる水衛生管理委員

12月9日、アチョリウォータープロジェクトで建設された第一号井戸が、Pukure村水衛生管理委員会に引き渡されました(仮共用。公式な引き渡しは全サイトの工事終了後)。Pukure村は、8月29日、水環境省大臣、藤田日本大使の立ち合いの下、本プロジェクトの起工式が行われたサイトです。それから約3ヶ月半、待ちに待った新しい井戸が、住民の管理下に移されたこととなります。

引き渡し式には、アムル県の給水担当局長、ラモギ郡の郡長などのウガンダ関係者の他、コンサルタント(株)TECインターナショナル、施工業者(株)日さくの日本側関係者が集まり、アチョリ地域全体で75本の深井戸の栄えある第一号となったPukure村の井戸の完成を祝いました。

水衛生管理委員会は、既に、真新しい井戸の周りに、見事なまでに堅牢な柵を張り巡らせており、約1年に及んだ水衛生委員会の組織化と機能強化に関するソフトコンポーネントの成果がこんなところにも観察されました。

何よりも、水質は、極めて良好であり、報告者も早速、真新しいポンプからいともたやすく汲み上がる冷たく透明な水を一口飲んでみましたが、鉄味もなく、美味でした。

Pukure村では、これまで、南スーダンに向かう高速道路を越えた向かい側にある集落からの水汲みを余儀なくされてきました。加えて、この古い井戸は、雨期には表流水が容易に混入し、赤痢などの発生が、特に子供達の健康上の脅威となっていました。



新しい深井戸により、水汲みの労苦から解放されること以上に、衛生上の劇的な改善が期待されることが住民にとって大きな福音となっています。

「2012年の最初の調査から、長い時間が掛かったが、待っていて本当に良かった」という水衛生管理委員長の挨拶が実感を持って迫ってくる、そんな印象深い引き渡し式となりました。

左写真：頑丈な柵に守られた真新しいJICA井戸

無償資金協力

「アチョリ地域国内避難民定住促進のための地方給水計画(Acholi Water)」

本プロジェクトは、20年の国内避難民キャンプ生活を終え祖父伝来の村に戻ったアチョリ地域住民に対し、生活に必要となる安全水をコミュニティ内で提供することを目指すもの。アチョリ7県で合計75本の井戸、及び6カ所管路給水施設が建設される。無償資金供与総額は、9億7千3百万円。両国間のEN締結日は、2013年7月4日で、供与の期限は、2016年8月31日となっている。

河澄新ウガンダ事務所長のグル訪問

2014年10月、星所長の後任としてウガンダ事務所長に就任した河澄恭輔所長が、ウガンダでの最初の地方出張先にグルを選びました。

グルでは、グル県知事(LC5chair)、主任行政官(CAO)及びグルMunicipalityのタウンク拉克をそれぞれ表敬訪問しました。グル県知事は、JICAの北部ウガンダにおける復興支援事業を高く評価し、また、今後の協力、特に、地域住民の生計向上への支援に強い期待を表明されました。

河澄所長は、JICAが支援するAtiak-Nimule道路建設現場を視察しましたが、南スーダン国境近くでは、数日前の豪雨・冠水のため足止めを食っていた南スーダン向けの貨物トラックが、数キロにわたって渋滞している様子を目撃しました。その他、グル県で建設中のLapainatヘルスセンター及びKitgum県で建設されているKitgum-Matidi管路給水施設を訪問しました。限られた時間でしたが、新所長に、北部ウガンダ復興プログラムの進展、一方で、まだまだインフラ面での立ち遅れが目立つ様子を具に観察頂けたことは、グルオフィスとして、大変、貴重、かつ有意義なことでした。



AWATプロジェクト Kitgum-Matidiの現場で、コンサルタントの由本氏から説明を受ける河澄所長

河澄所長には、たまたまウガンダを訪問中だった本部アフリカ二課でウガンダ担当の奥本さん、ウガンダ事務所で農業分野を担当する村上さんが同行しました。一人一人の印象が重なり合うことで、北部ウガンダの実像が厚みを伴って理解されるものと確信しています。

来年からは新しい教室で授業です！

「ウガンダ北部アチヨリ地域国内避難民帰還・定住促進のためのコミュニティ再生計画」(REPRE)



Pader県Papaa小学校。後ろに見える3棟が新設教室棟。この学校では今年になって植樹や校内敷地の整備などが急速に進んでおり、プロジェクトとの相乗効果が見られます。

2012年末から工事が始まったREPREプロジェクト。本年8月完了予定でしたが、雨期には学校に通じる道路が不通になり、資材が現場に届かなかったり、建設に携わる地元の建設業者が計画通りに工事を進められなかったり、いろいろと大変なことがありました。しかしようやく完工が見えてきました。本号では、Before/Afterの写真で、REPREの施設を紹介します。

新しい机で姿勢良く！



学習環境が大きく改善されました！雨が降ってももう大丈夫！



木の下から、茅葺小屋から



**紛争予防・平和構築無償資金協力
「ウガンダ北部アチヨリ地域国内避難民帰還・定住促進のためのコミュニティ再生計画」(REPRE)**

同プロジェクトは、アチヨリ地域における国内避難民の定住を支援する為の教育施設(教室・教師住居・トイレ・井戸)、保健施設の建設、付随するアクセス道路の整備など行う約11.5億円の無償プロジェクト。

2011年には、国内避難民キャンプが閉鎖され、ほとんどの避難民は帰還したが、帰還先の教育・保健などのインフラが不十分なために多くの人々が不自由な生活を送っている。本プロジェクトでは教育・保健・水・道路などマルチセクターに対し機能性を考慮した支援を行うことで、住民の生活の質の向上に貢献する。

協力対象施設概要

分野	対象	内容
教育	35小学校	教室、教員住居、トイレなど
保健	3ヘルスセンター	外来棟、入院棟、医療機器など
水	21小学校と2ヘルスセンター	新規井戸の設置もしくは既存井戸の修理
アクセス道路	各施設への接続道路	道路修復及び排水管の設置



2011年6月夕方、ウガンダ北西部Masindi県の小学校の教室棟に雷が落ち、雨が止むのを教室で待っていた児童と教師計18名が亡くなり、36名が病院に運ばれました。ウガンダでは雨の時期には校舎に落雷する事故が毎年報告されます。今回のプロジェクトの建設現場でも、建設中のトイレが落雷によって損傷、作り直した現場もあります。このような事故を防ぐため、プロジェクトで建設される教室棟、教員住居、保健所施設にはすべてこのような避雷針が設置されています。

新校舎でこんな光景が！



校長先生によると「教室を汚さないように、汚いスリッパは脱いで入る」ことになったとか。そまでする必要はないとは思いつつ、そんな気持ちを少し嬉しかったです。

CAROWAA

REPREプロジェクト： 学校は教室だけではありません

REPREプロジェクトでは、教室棟の他、トイレ、教員住居、通学路などを総合的に支援しています。このようなやり方は他ではあまり行われておらず、学校としての機能を大きく向上させる取り組みであると、首相府、各県関係者からも高く評価されています。



新しいトイレには、衛生的に長く使ってもらうためのメッセージが描かれています。



茅葺屋根が従来の教員住居。これで、教師も学校の業務に集中できます。



雨の時期には歩くことさえできなかった道路が、こんなに立派になりました。これで児童も教師も問題なく登校できます。



学校に井戸が無ければ、のどが乾いたら校外に探しに行くか、我慢するか。掃除にも、給食の準備にも、水が必要です。遠くまで水を汲みに行く必要は、もうありません。

REPRE番外編：

50年カンパラから外に出なかったトロフィーが北部ウガンダへ



11月に学校で行われたCompetition祝勝会でダンスを披露する児童。

ウガンダの小学校の2学期(5月から8月)の最大のイベントは、Music and Dance Competitionです。郡の予選、県の予選、地域の予選を勝ち残った小学校が、全国大会に臨みます。War dance(2006年の映画。2007年Academy Award Nominee: Best Documentary Feature)という映画をご覧になった方もいるかと思いますが、それはこのCompetitionの実話です。映画では、北部ウガンダから出場したPatongo小学校は、伝統ダンス分門では最優秀となるものの、総合優勝はできませんでした。独立から50年来、総合優勝のトロフィーはカンパラから出たことがなかったそうです。

それが今年、北部ウガンダ、アチヨリ代表校Agago県のKalongo小学校が、総合優勝を果たしました。同校は我々のプロジェクトの対象小学校ではありませんが、地域のモデル小学校として、対象小学校の施設運営改善のためのワークショップの際になどに協力されている、関係の深い小学校です。

モデル小学校とは言っても、学校の施設に関しては、どこにでもある地方の大きな小学校、教室環境はプロジェクト対象校よりむしろ悪いくらいです。1教室160名の児童が直接床に座って授業を受けています。

このような学習環境ですが、同校はAgago県で1、2を争う成績優秀校でもあります。Competitionの祝勝会では県の教育官が「この学校も、他の学校と同様に、内戦により本当にボロボロだった。だが校長はじめ関係者の努力で、奇跡のように生返った」とコメントしました。生返ったとはいえ、教室もトイレの数も足りません。寮生もいますが、古い教室を寮に転用しているので、生活環境は決して良いとは言えません。しかし、そんな状況を言い訳にせず、結果を出している教師や生徒たち、さらに良くなろうと日々努力している姿に、ワークショップ参加者たちは大きな刺激を受けました。Competitionについて、同じく教育官によると、トロフィーがカンパラ外、それも北部に出るのを快く思わない人たちが、「Kalongo Secondary SchoolというMasaka県(中部ウガンダ)の中学校が、小学校部門に出場して優勝した」という、デマまで流したとか。子供たちの学習環境には、他の地域と比べてもまだまだ課題の多い北部ウガンダですが、Kalongo小学校の優勝は、大きな希望を与えてくれました。



Danceも成績も、Agago県で1番のこの学校も、4年生160人が、1つの教室で、床に直接座り、授業を受けています。

南スーダン難民支援稲作栽培指導-UNHCRとの連携事業



稲の発育状況をモニターするJICA/UNHCRチーム

北部ウガンダ西ナイル地域は、長い間、コンゴ民主共和国、南スーダン、ルワンダなど、内戦の絶えない周辺国からの難民に居留地を提供して来ました。2013年12月に発生した南スーダンの内部抗争では、西ナイル地域アジュマニ県に10万人を超える難民が新たに受け入れられました。

2014年10月、JICAは、UNHCRと連携協定(MOU)を締結し、南スーダン難民及び受入コミュニティに対する稲作技術指導を開始しました。直接の指導に関わるのは、JICA コメ振興プロジェクト(PRIDe)の日本人専門家及びウガンダ人スタッフです。協定に遡る本年7月には、アジュマニ県において南スーダン難民農家とホストコミュニティ農家を対象に稲作指導とネリカ米の種もみの供与が行われました。2014年11月に実施されたUNHCRとの合同フォローアップ調査では、栽植スペースや除草に関するアドバイスの他、2年目の協力についてUNHCRと協議が行われました。

本件、稲作支援事業は、PRIDeの枠内で実施されるものですが、通常の場合の地方政府に代わりUNHCRとその協力者であるDanish Refugee Councilが現場でモニタリングを行うなど、特徴のある協力となっています。

難民ホストコミュニティにおける稲作栽培が難民の経済自立に貢献できるようグルフィールドオフィスからも見守って行きたいと思います。

安全情報:銃による犯罪が増えています！

国連安全対策部からの事件レポートによると、11月4日から6日の間に北部ウガンダで、2件の銃(南スーダンからの銃の流入も問題になっています)を用いた犯罪がありました。1つは夜中3時ごろの夜行バス強盗。もう1件は、日本人関係者が最も頻繁に通行するGulu-Kitgum道路のKitgumの町の少し手前での事件。アジア系の2人のビジネスマンが、銃を持った賊に襲われ、現金2千万シリングを奪われたとのこと。

11月23日の夕方には、グル県でトラックを襲った強盗が捕まり、またカンパラに向かう道路で、積み荷の炭に隠していた銃が発見されました。

新聞などのニュースにはなっていませんが、グル市内のにぎやかな通りの一つであるAcholi Roadでは、夜間女性などを狙ったひったくりが増えているとのこと。

象やカバなど野生動物による、田畑や住民への被害も頻発するアチョリ地域ですが、街中に住んでいる我々には、夜間の銃犯罪が最も注意すべきポイントです。

クリスマスから年末年始にかけては、一般的にも犯罪が増える時期です。雨による急な路況の悪化もまだまだあります。フィールドからまたカンパラからの移動は、余裕をもって計画し、特に夜間の移動は極力避けるよう、関係者の間で注意を払っています。

アチョリ交通ルール！



プロジェクトの工事現場を視察していたら、向こうのほうに人影が。村の中に日本人がいるのが珍しいのか、わざわざバイクを止めてこちらを見ている様子。周囲の様子を撮った写真に、偶然写っていたこのバイクを何気なく拡大してみてもびっくり、なんと5人乗りでした。首都カンパラでは3人乗りでも警察に捕まりますが、アチョリではバイクはファミリーカーです。

～人の動き～

グルが取り持つ縁？！

ここ数か月、北部ウガンダ長期滞在者の出入りはありませんでしたが、年末にREPREプロジェクトの2名のコンサルタントの方が、約2年に及ぶKitgumを拠点にした業務を終了し帰国されました。またACAPプロジェクトでは、9月から12月にかけて、4名の短期専門家が帰国。年末年始の休暇でグルを離れる人もいて、グルの日本人社会人口は瞬間的に激減状態です。一方で、最近帰国された専門家の皆さんが、年末に東京で集まられたとのこと(休暇中のグル事務所高橋も参加)。これもグルが取り持つ縁、でしょうか。今年も、ここグルでの新しい出会いが、いろいろなところに広がっていきますように。

～GFOあれこれ～

右写真は、グル事務所での年越し焼肉の様子。技術協力プロジェクトACAP(地方行政官行能力向上プロジェクト)3名、Acholi Water2名、REPRE1名、グル事務所1名と猫1匹。グル居残り日本人関係者全員で、年越しそばをいただきました。



<編集後記>

あけましておめでとうございます。

2014年は、1月のJICA理事長の北部訪問に始まり、首相府Permanent Secretaryのグル事務所訪問とプロジェクトサイト視察。5月には北部復興支援プログラムの中間評価があり、8月にはAcholi Waterの起工式が、ウ国水環境大臣、藤田日本国大使ご臨席のもと行われました。

2015年度は、北部復興支援プログラム第1フェーズの最終年度。しめくりと、次期に向けてグル事務所一同、引き続き頑張ります。本年もよろしく願いいたします。

(グル事務所 高橋嘉行・佐藤由理)